

18. 肝臓の胆管細胞癌

誌名	鶏病研究会報
ISSN	0285709X
著者	佐藤, ゆり恵
巻/号	44巻1号
掲載ページ	p. 29
発行年月	2008年5月

18. 肝臓の胆管細胞癌 (Cholangiocellular carcinoma in liver)

キーワード：肝臓原発腫瘍，腺管構造，採卵鶏



写真 1. 肝臓右葉に 6×5.5×4 cm, 左葉に 2×1.5×1 cm の乳白色分葉状腫瘍が認められた。

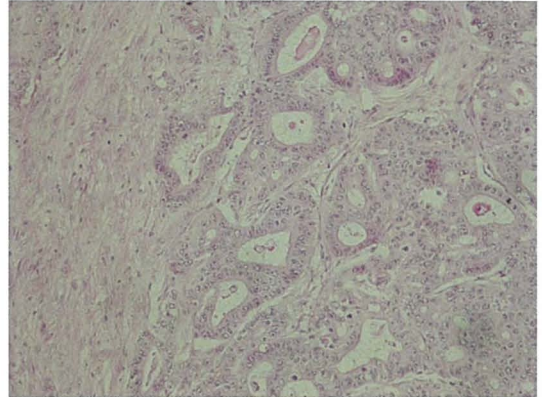


写真 2. 肝臓の腫瘍は比較的発達した結合組織により大きく区画されていた。個々の腺管構造の周囲は細い結合組織により取り囲まれていた。HE 染色。

動物：採卵鶏，雌，成鶏

発生状況および症状：県内食鳥処理場にて処理した 14,427 羽のうちの一羽。内臓摘出後の検査において、肝臓、卵巣、脾臓および腸間膜に腫瘍がみられた。

肉眼所見：肝臓右葉および左葉に、小腫瘍が集合したような乳白色分葉状腫瘍を認めた（写真 1）。腫瘍の断面は乳白色、充実性で、結合組織により分葉を呈し、弾力があり、一部壊死が認められた。卵巣にも 2 箇所、乳白色腫瘍が認められ成熟卵胞はなかった。卵管は萎縮しており、腫瘍は認められなかった。また、脾臓、腸間膜および十二指腸に小腫瘍が認められた。

組織所見：肝臓の腫瘍は、淡明で円形～楕円形の核と弱好酸性の細胞質を持つ立方～円柱状の腫瘍細胞が、大小の腺管様構造を形成し、腺腔内に弱好酸性の物質を入れる像もみられた（写真 2）。卵巣の腫瘍も同様の所見であった。脾臓および腸間膜の腫瘍では、核が濃染された紡錘形の細胞と明るい核を持つ細胞が充実性に増殖し、明瞭な腺管構造

は確認できなかった。アザン染色では、肝臓の腫瘍は比較的発達した結合組織により、大きく胞巣状に区画されていた。鍍銀染色では、個々の腺管の周囲を取り囲むように好銀線維が発達していた。卵巣の腫瘍においても同様の所見であった。抗ケラチン抗体を用いた免疫染色では、肝組織中の胆管および腫瘍細胞は陽性を示した。抗ビメンチン抗体、抗オボアルブミン抗体では陰性を示した。また、抗 SMA 抗体では、卵巣由来の腺癌で見られるような平滑筋細胞の増殖は見られなかった。

解説：本症例では肝臓に最大腫瘍が認められ、病理組織学的検索結果から、卵巣およびその他の臓器にみられた腫瘍は肝臓腫瘍の転移巣であると考えられた。胆管細胞癌は、肝門部中心に発生することが多く、胆管の構造に類似した腺癌で、まれに扁平上皮様の構造をみることもある。間質結合組織の増生を伴い、腫瘍細胞は円柱～立方形の細胞で、不規則な管腔、あるいは不完全な腺腔をつくる。本症例では、腫瘍断面が分葉状にみられたこと、立方～円柱の腫瘍細胞による腺管構造で構成されていたこと、腫瘍細胞がケラチン陽性であったことなど、胆管細胞癌を疑う所見が主であったことから胆管細胞癌と診断した。